

【ミサを生きる】(4)

(「ミサの鑑賞—感謝の祭儀をささげるために—」吉池吉高 オリエンズ宗教研究所)

※ミサを基礎付けるもの イエスの復活

ミサが最後の晩餐の記念として、なぜ今も、共同の食事の形を保持しているのかということを考えてみました。

しかし、ミサは最後の晩餐の記念だけではありません。最後の晩餐とその記念してのミサの間には、大きな溝が横たわっていることを私たちは知っています。それは、イエスの十字架の死と復活という福音書の語る出来事です。このことがミサとどのように関係しているかを見なければなりません。

弟子たちはイエスと自分たちとのかつての絆を、イエスの死後も存続させていくために、イエスの最後の願いに忠実であろうと願ったことでしょう。けれども、彼らが実際にそのような思いに立ち戻り、一つになることができるためには、新たな出来事が必要でした。

弟子たちは十字架のイエスを見捨てて、彼を裏切ってしまったからです。その弟子たちがイエスのあの最後の願いに立ち戻り、それを伝えていくようになるには、イエスとの関係において弟子たちに新たな何かが起こらなかつたなら、そのような気持ちにはなり得なかつたことでしょう。十字架に向かうイエスを見捨て、裏切ってしまうことによって、弟子たちはイエスを追憶する資格を失ってしまったのです。自らそれを放棄してしまったのです。

弟子たちが体験したイエスの復活という出来事がなかつたなら、最後の晩餐の記念としてミサを執り行うことなど到底考えられなかつたことでしょう。たとえ、弟子たちがイエスを思い起こし、自分たちの非を悔いて、イエスのあの遺言に立ち戻り、それを守り行おうとしたとしても、それは弟子たちにとって死ぬほどつらい、悲しみの儀式以外のなにものでもなかつたはずです。そしてもしそうなら、それは彼らの間だけで、しめやかにひっそりと執り行われるべきものであつたはずです。けれども、教会が弟子たちから受け継いだミサは、そのような悲しみに満ちた暗い儀式ではありません。むしろ、それはその名が示す通り、喜びに満ちた感謝の祭儀です。

弟子たちの中に、新たな何ごとかが起こらなかつたなら、このようなイエス・キリストを記念する祭儀は生まれなかつたに違いありません。そのまったく新たに弟子たちに起こつた出来事、それが福音書の語るイエスの復活という出来事です。

復活のイエスとの出会いの体験を通して、弟子たちは自分たちがゆるされていることを知つたのです。思い出すだけでもみのすくむほどに、弱さと不信仰を露呈してしまつた自分たちを、何事もなかつたかのように受け入れてくださる復活されたイエスと、彼らは真実に出会つたのです。…弟子たちが再び会つてよかったのは、彼らが十字架の上に見捨てたイエスにほかなりません。けれども、そのイエ

スは彼らを信頼しきって、かつてのように、しかし、今やまったく新たに、自分の願いを弟子たちに託すのです。

(「ミサの鑑賞—感謝の祭儀をささげるために—」吉池吉高 オリエンズ宗教研究所)